を築く事になると、桃源院は廃城となった千石城の中腹に地蔵尊と共に移されました。

桃源院は同じく上野館の城下町に境内を構えた石雲寺と共に庇護され、境内には茂庭良元（松山初代）の姉である「月窓妙光大姉」や茂庭定元（松山二代）に娘「辰」の墓碑が建立されています。

山門は一間一戸の楼門形式で、入母屋、瓦葺きで規模は小さいながら均整の取れた美しい建物です。宗派：曹洞宗。山号：延命山。本尊：聖観世音菩薩。

安政六年（一八五九）建立の文覚上人遺址碑と文覚上人垢離の池があり、今でも水が枯れることがありません。

昭和四十五年に遠藤家の七百七十年法要があり石燈の記念碑が建てられました。本堂内には阿弥陀の来迎三尊仏がまつられております。

当寺には、松山初代良元の姉君、お南の方、戒名「月窓妙光大姉」のお墓があり、五輪の塔の台座を御奉納とありますが、今は残されていません。また、領主二代定元息女で、原田甲斐宗輔の長男、帯刀宗誠の妻「辰」の墓もあります。

徳川時代、茂庭家の当主は毎年正月十一日、石雲寺にある歴代の墓に参詣し、ついで桃源院の「古左月君之御影」即ち、左月良直像に焼香するのが例であったと記されています。しかし今はその御影は残されていません。

また、当地出身の洋画家「渡辺亮輔」や昭和の名歌手「フランク永井」の墓もあります。

昭和五十八年十一月、曹洞宗の寺院が少ない多摩の地に都市開教を目的として別院が東京都日野市に創立されました。

「法輪転ずれば　食輪全うす」

正しい教えを一生懸命布教すれば、どうにか生きていくことは出来るものだ。これを座右の銘として、梅庭庵・白雲・紫雲・青雲と建物を増やして今日の発展に至っています。

「一語を以て答えよう大麦は冬蒔いて来年の夏に実る」

すなわち、来世に結果が現われることです。

三つ目には順後次受です。生々世々を重ね長年月の未来に受ける応報です。順後次受とは何ですか問われたとき、道元禅師はただ一語、「好堅樹」と答えました。

そこで「好堅樹」とは何かと調べてみます。言葉をいろいろ調べてみるのも楽しいものです。

「大智度論」の弟十巻、第三十三問答にこれが出てくるのです。

譬えば樹あって、名付けて好堅となすが如し。この樹、地中にあって百年を費やし、枝葉具足して、一日に出生すること高さ百丈。この樹出でておわり、大樹を求めてその身を蔭わんと欲す。是の時、林中に神あり て好堅樹に語って伝く、世中汝より大なる者なし、諸樹皆当に汝が蔭中に在るべし。仏も亦是の如しと。

生々世々、時を経て報を受けるのは、この好堅樹に似ています。

この樹は百年間地中にあって芽を出すのですが、いったん芽を出すと一日に百メートルの高さになり、ずんずんと大きくなるのです。　百年もの間熟成された因果が爆発するが如くに成長するのだそうです。まるであの「ジャックと豆の木」、或いはMLBドジャースの大谷翔平のようです。

この好堅樹は「寄らば大樹の蔭」で、自分より大きな大樹を探して、その蔭に庇護して貰おうとするのです。

すると森の神が現われてこう言いました。

「これこれ、この世にお前より大きいものはもう一つもないのだよ。すべての樹がお前の蔭の中に入ってしまっているのだよ」と。

仏というものはこの好堅樹の如きものなのです。一朝一夕の善業によって出現するのではないのです。ただし、ひとたび出現すると、一切を超えて偉大で、一切を救うものになります。

この世を、この世きりと思うのを「断見」といいます。この時代も利益で人を釣る外道（現世利益を説く宗教）がはびこっていました。利益は手っ取り早く、すぐに手に入るべきものと思っているのです。

本尊を拝むと、利益は、蕎麦よりも早く実らないと承知しないというのです。こんなのは断見の見本であり、そんなのは目先のご利益現報だけの偏見ですが、人々は砂糖にたかる蟻のようにこれに集まってしまうのです。

時代は再び急転直下して、明治三十年代にアイルランド系ギリシャ人ラフカジオ・ハーン（小泉八雲）【正覚院殿浄華八雲居士。墓は東京の雑司ヶ谷霊園】が一人の日本女性の手記を「或る女の日記」として英訳しています。

ハーンの家に奉公していた「お米」という女中が縁があり、鈴木幸三の後妻に請われて嫁ぎました。

そうした ある日、亡くなった先妻の針箱から日記が出てきたのです。細長い十七枚の柔らかな紙を絹の紐で綴じて、文章は簡単な漢字と仮名で記されていました。それを泣く泣く読んで、もとの奉公先であるハーンに見せたものです。

ハーンもこれを読んで限りなく感動し、ほとんどそのまま英文に訳しました。

（以前、松江に行ったときハーンの住んでいた武家屋敷作りの家と庭を訪ねましたが、清楚で落ちついた佇まいでした）

さてそのあらすじは、薄給の主人につかえ、内職で煙草屋の紙巻き煙草を作っていました。この女性は何も特にすぐれた人ではなくて、小学校を出ただけの平凡な家庭の主婦です。彼女の主人は役所の下級吏員で、六畳と三畳の二間に住み、十圓の月給で暮らしています。夫婦のあいだに三人の子供が生まれました。三人の子供は相ついで肺結核で死に、重なる不幸に夫婦は嘆き悲しみます。この時、殊勝にも妻は夫が悲嘆のあまり体を壊さないか、自暴自棄にならないかと気を使います。また夫は「天命なれば是非もなし」と何度も何度も言って妻を慰めます。

二人は、この世の苦労はみな前世に犯した過ちの酬いだと信じ、非運に会うたびにけな

ラフカジオ。ハーン（小泉八雲）

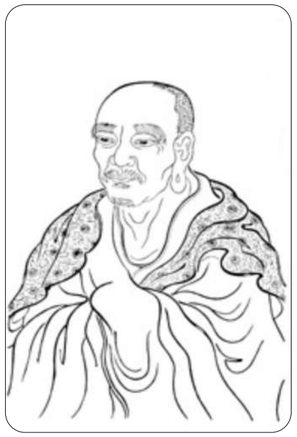
私だけがどうして不幸なのだろう

鳩摩羅多

因果応報

鳩摩羅多（くまらた）【？―二二】

禅宗インド相承十九祖。月氏国（イラン系遊牧民）の婆羅門に生まれ、始めは仏法を信じなかったが、十八祖伽耶舎多の所説を聴いて出家、受戒の後、道果を証して大法を受けた。北天竺（北インド）に行化の際、闍夜多を得て法眼を付しました。



西天の第二十祖闍夜多大士、鳩摩羅多尊者に問う。我が家の父母素より三宝を信ず、而も昔より厄介な疾患に苛まれ、凡そ営作する所、また意の如くならず。

人間の運不運というものは、なかなかに難解な問題で説明に窮するものです。生れつき器量がよくてたちまちアイドルになったり、玉の輿に乗る人もいれば、生れつき障害を持ち生涯不自由な生活をする人もいます。健康で長寿を保ち、子孫も繁栄して、ニコニコ顔で一生をすごす人もあれば、幸福な結婚をして満ち足りていた人が、中年過ぎる頃に子供の非行に泣き明かすということもあります。なかには、その涙の時期が明け、いろんな問題が解決してやれやれというときに難病にかかり、長いあいだベッドの上で死と対峙して苦しみ悩む人もいるのです。

道元禅師の語録「永平広録」を読んでいたら、まさにこの問題を取り扱ったところに出会って、興味を引かれました。

これは西天すなわちインドの迦葉尊者から数えて第二十代の尊者になった闍夜多がまだ修行をしていた頃に、やっと第十九祖の鳩摩羅多尊者に会うことが出来て、次のように尋ねたというのです。

「我が家の父はもとより三宝を信ず」

私の両親はずっと前から仏道に入り、仏法僧の三宝を信じて敬虔に暮らしております。

（仏とは真理の体得者、法とは真理そのもの、僧とは真理を体得せんとして修行する人。これを三宝といいます）

「しかも昔より疾患に苛まれ、おおよそ営作するところ、みな意の如くならず」

それなのに、以前からよく病気にとりつかれ、父がやっとよくなると、今度は母が大病にかかるというふうであり、

「おおよそ営作する所」

また、なにをやりましても全てが全てに障害が現れて失敗ばかりしております。……つまり順調に事が運ばず、人に騙されたり、思わぬ邪魔が入ったりして不幸な生活をしているというのです。

「我が隣家、久しく旃陀羅の行を為せども、身常に勇健にして、所作和合す。彼に何の幸かある、我に何の辜かある」

古代インドのきびしい身分制度……釈尊がこのカースト制度否定されたことは偉大な革新だったのです……このカースト制度の中で、我が家より下層である隣の家では、皆健康で何事もうまくいっています。私の家の不幸と、隣の家の幸福とはいったい何に由来するのでしょうか？

さて、道元禅師は永平寺の法堂にてこんな話をしました。これは「景徳伝灯録」の第二巻「第十九祖鳩摩羅多」の章に出てきます。

この疑問は、太古以来現在まで人類が問い続けてきた問題であり、わが身の上でも古今東西の多くの人間の身の上でも、形を変え、程度を変え、ニュアンスを変えて提起され続けて来ました。

「私だけ、或いは私たちだけどうしてこんな目に遭わなければならないのでしょうか」

という人も多いです。

しかし多少オーバーな言い方ですが、広く世界をみれば、それより百倍も千倍も、領土

戦争や宗教戦争、人権抑圧などで、ひどい目に遭っている人がたくさんいるのです。それこそ、世界は広く「上を見たならきりが無い」という諺そのままです。

どうかすると、不幸に遭遇した人は近視眼になって「私だけが、私たちだけが・・・」とどうしても思いがちです。

この切実な質問に答えて鳩摩羅多尊者は次のように述べました。

釈尊曰く、何ぞ疑うに足らんや。且く善悪の報に三時あり。凡人は恒に仁は夫、暴は寿、逆は吉、義は凶なるを見て、便ち謂う、因果なく罪福なしと。殊に知らず、影響相随うことを毫も疑うことを靡く、縱え百千万劫を経とも、亦摩滅せざることを。

「何ぞ疑うに足らんや」……

信仰篤いあなたの一家が不運続きで、隣家が幸福だという。

しかし、それくらいで信仰がぐらつくというのはあまりにも近視眼的です。

それは善悪の果報に過去、現在、未来の三時のあることを知らないからです。

清き心のまま若死にする者、嫌われながら長生きする人、邪悪な行いをしながら運の良い者、正しい行いに励みながら不運を招く人もいます。

だから、因果の法は存在せず、世の中はでたらめで、運不運もまたまぐれ当りだという。

けれども、これは善悪の報に過去・現在・未来があることを知らないからなのです。

「影響」すなわち因果というものは必ず付きまといます、少しの間違いも、寸分の狂いもなく、永遠に消えてなくなるものではないのです。

時に闍夜多、是の語を聞き已るや、頓に所疑を解くく。

過去の業、現在の業、未来の業の三つがあって、因果は歴然として少しの狂いもなく、一度行った善悪の業は永劫に消え去るものではないのです。

これを聴くや闍夜多は、

「頓に」……たちまち、胸につかえていた疑いの雲が晴れたというのです。

問答は続きます。

善悪の業とそれからの解脱とはなにかということになります。

東京ドームの空間いっぱいの、テグスのような絡み合った過去からの因果は、何によって切るか。もし切れたらその因果は未来にどのような影響を与えるのか。

一度行った悪行は少しの狂いもなく悪果となって現在世に、未来世に現れる。これをごまかして、やれそんなものはまぐれ当たりだなどというのは、大変な間違いを犯しているのです。しかしそれでは、未来永劫消えない三時にわたる悪行をどのようにして始末したらいいのでしょうか。

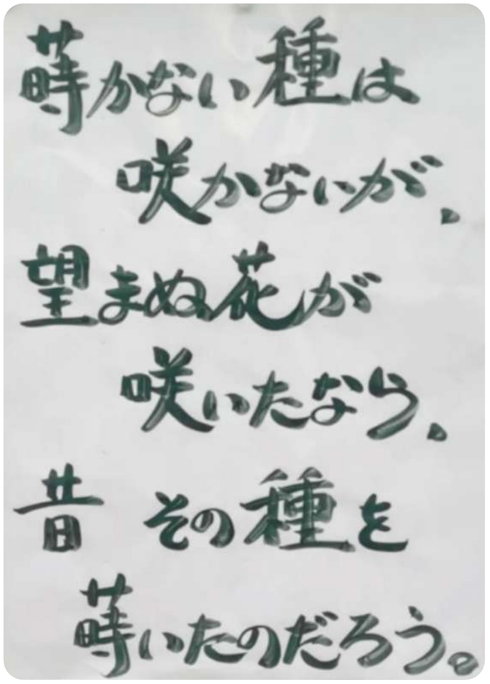
直ちにこの三時の悪行悪果から超脱するすべはないのか。この道こそが仏法であり、禅宗では坐禅であり浄土系では念仏、日蓮宗はお題目なのです。

ところが話はここで終わっていて、最も肝心なこの方法について、道元禅師はわざと語っていないのです。

前段の話は今から一千九百六十年ばかりも昔のことで鳩摩羅多尊者の入寂は新室十四年と伝わっていますから、もしそうだとすれば、西暦紀元二十二年になります。道元禅師はそのような大昔の話をした後に、急転直下してこう続けます。

或人永平に、如何が是れ現報と問わば、祇他の対に道わん、現報は乃ち蕎麦なりと。もし人あって、この永平道元に向って現報とは何かと問うならば、私はその人のために、ただ次の一語で答えろであろう。「現報は乃ち蕎麦なり」と。或如何が是れ生報と問うことあらば、祇他の対に道わん、生報は乃ち大麦なりと。或如何が是れ後報と問うことあらば、祇他の対に道わん、後報は乃ち好堅樹なりと。

因果応報、因果には時間的に三つの応報があります。順現報受、順次報受そして順後次受です。

一つ目はすぐに目の前に現れる応報、順現報受はいわば蕎麦のようなものです。蕎麦は初秋に蒔いて七十日で実ります。

二つ目には順次報受です、生を変えて受ける応報です。